

平成21年 6 月16日現在

研究種目：基盤研究◎

研究期間：2005～2008 年度

課題番号：17520567

研究課題名（和文） 北海道における民俗芸能の伝承に関する研究

研究課題名（英文） Research on the Handing down of Folk Entertainments in Hokkaido

研究代表者

舟山直治 (FUNAYAMA NAOJI)

北海道開拓記念館・学芸部・研究員

研究者番号：90181445

研究成果の概要：

本研究課題は、北海道における民俗芸能の伝承者や伝承・保存会の活動など無形民俗資料について調査し、それぞれのデータを集積し、分類した。また、民俗芸能に係わる道具類など有形民俗資料調査を道内の神社および博物館で実施した。これら道内の民俗芸能にかかわる有形・無形のデータを時系列に整理し、伝承の系統図を作成するための基礎資料を作成した。あわせて成果を公開するためのデータベース構築に向けて調査を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,100,000	450,000	3,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗芸能、伝承、保存会、地域間交流、祭礼、御輿渡御、松前神楽、三匹鹿子舞

1. 研究開始当初の背景

北海道は、アイヌ民族による歌舞、近世期から伝承されている松前神楽や鹿子踊り、19世紀後半以降に移住者が道外の郷里から伝えられた神楽や獅子舞、アイヌ民族と文化を異にする移住者との様々な交流により相互に影響を受けた民俗芸能もみられるなど、豊富でかつバラエティーに富んだ民俗芸能の伝承地といえる。ところが、その多くは道外のいわゆる伝承元の亜流と認識されることが多く、アイヌ民族による古式舞踊などを除き、広く取り上げられることがなかった。

そもそも民俗芸能は、全国の祭りや年中行

事のなかで伝承されてきた各地域の貴重な無形民俗文化財であり、日本の芸能史を語るうえでも重要な資料と認識されながら、悉皆調査が進んでいるとは言い難いといえる。今日では過疎化のほか、さまざまな社会的要因によって民俗芸能の伝承は困難な状況にもある。保存会活動が停滞していく現状を危惧して、国は各都道府県に対して民俗芸能の緊急調査を促し、北海道においても各市町村へのアンケート調査をするとともに、アンケートの回答を精査して、記録や保存が遅れているもの、衰退や大きな変容の危機があるもの、今なら旧態を記録することができるもの

を選定して詳細調査を行った(北海道教育委員会 1998)。そして、伝承地となった北海道の民俗芸能と、源となった伝承元の関連を注目点の一つであると指摘している。また、伝承元ではすでに喪失した民俗芸能が、道内に残っているという事例をとりあげてもいる。このように伝承元で失われた民俗芸能が重要視されている点は、先にも触れたように伝承元の亜流という認識が背景にあると考えられる。

一方、道内に現存する民俗芸能は、アイヌ民族や本州の伝承元に由来する文化要素が単に取り込まれたものだけではなく、異なる文化要素の融合や新たな創造がみられるとして、北海道開拓記念館では 2003(平成 15)年から 5 カ年計画の分野別研究「北海道文化の形成と変容に関する民族・民俗学的研究」を実施した。この分野別研究では、民俗芸能に関係する文献や絵画史料の解析を行うとともに(手塚・池田・三浦 2005, 手塚・舟山・三浦 2005)、各種の民俗芸能がその伝承の起因となった要素を抽出することを通して、民俗芸能を取り入れた背景と意義を整理するとともに、地域社会に対する民俗芸能の役割の一端を明らかにしたのである。しかし、この調査の中で、活動停止中の民俗芸能、すでに使われなくなって博物館や神社に納められた神楽や獅子舞の多くが、各種のアンケート調査から漏れていたことを改めて認識した(北海道開拓記念館 2004)。また、これまでの史資料だけでは 19 世紀以降に道内に取り入れられた民俗芸能の役割の復元は難しいと実感したのである。

そこで道内各地域の伝承者とその芸能、郷里など母胎となった地域との比較研究に加えて、すでに途絶えて博物館や神社等に保管されている有形の資料をさらに掘り起こして、有形・無形のデータを再集積する必要がある。また、道内への伝承時期や導入した背景を時系列に整理し、北海道における民俗芸能の実態を解明するため本研究を実施するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、北海道の民俗芸能を取り上げて、それぞれが道内に伝播されるに至った経緯、あるいは北海道で伝承あるいは消失した過程を明らかにすることにある。調査対象は、保存会などが保管している民俗芸能の映像記録化だけではなく、すでに途絶えて博物館や神社などに保存されている有形の資料も含めて調査する。そして、舞、道具類、台本など、民俗芸能にかかわる有形・無形の民俗資料を掘り起こすとともに、類似する地域と相互に比較することによって、北海道における民俗芸能の芸能とその特徴について明示したいと考える。

北海道は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて 46 都府県から 200 万人を越える移住者を受け入れた事により、短期間に郷里を異にする人々が集落を形成してきたといえる。この北海道移住という歴史的な背景の中で民俗芸能は、当初には同郷の人々と母村とを結びつけるものとして取り入れたものが多い。

ところが、伝承の過程には、同郷だけにとどまらず故郷を異にする人々にも受け入れられた事例、あるいは伝承困難となった事例など、さまざまな事例が想定できる。これら民俗芸能にかかわるデータは、ただ単にその伝承過程を明らかにするだけではなく、移住者が形成した共同体における歴史の一端を明らかにすることのできる極めて貴重な資料なのである。

現在、北海道には神楽や獅子舞などの民俗芸能を保存する団体が 200 を超えて活動している。しかし、近年ではそのほとんどの団体において高齢化が進み、後継者不足の問題や、なかには活動停止に至っているものも少なくない。このままでは、民俗芸能の伝承が困難となる団体が増えるだけでなく、保管されている有形・無形の資料などが散逸する可能性がある。したがって、減少傾向がさらに進む以前に、データを速やかに集積する必要がある。あわせて、調査をするだけではなく、研究成果を広く普及し、無形の民俗芸能を後世に伝えていく必要性と、その難しさについて理解を深めたいと考える。

北海道開拓記念館では、1974 年度から 1979 年度まで行った第 2 次特別研究「野幌丘陵とその周辺の自然と民俗」において、野幌太々神楽の衣装や道具類、舞などを詳細に記録したことにより、有形・無形の資料の散逸を防ぐとともに、調査研究の成果を地域に還元して地域における伝承を側面から支援した。1985 年度以降には、野幌地区の狭い範囲に限られていた保存会に加え、江別市内全域からボランティアを広く集めた伝承会が結成され、2つの組織によって神楽が確実に伝承されるに至っている。このように、先駆的な伝承方法を形作った野幌太々神楽の事例を広く紹介し、他地域の民俗芸能における保存活動の活性化に向けて貢献したいと考える。

3. 研究の方法

まず、北海道における民俗芸能の伝承についての現状把握とその特徴を抽出するため、北海道新聞社が 1983(昭和 58)年 6 月 14 日付で発行した『郷土芸能特集』の「道内の郷土芸能市町村別の一覧」(北海道新聞社 1983 pp.6-7)に記載された民俗芸能と、北海道教育委員会が 1998(平成 10)年に刊行した『北海道の民俗芸能』の「北海道の民俗芸能一覧」(北海道教育委員 1998 pp.151-162)に記載し

た民俗芸能を取り上げ、民俗芸能の名称を元に分類し、整理する。次に、前者の民俗芸能を a、後者を b とし、両資料の調査報告時期の 15 年の時差を利用して、道内における民俗芸能の数量的な変化を分類ごとに示す作業を行った。

a には、416 件の民俗芸能がみられる。民俗芸能の名称を元に細分すると、神楽系 125 件、風流系 231 件(創作太鼓 132 件を含む)、語り物・祝福芸 1 件、その他 51 件、アイヌ古式舞踊 8 件となる。また、b には、214 件の民俗芸能がみられる。同じく細分すると、神楽系 101 件、風流系 73(太鼓 2 件を含む)件、語り物・祝福芸 1 件、その他 24 件、アイヌ古式舞踊 15 件である。

データの総数では、a から b までに、ほぼ半減していることになる。これは特に b のアンケート調査は、第 2 次世界大戦前から伝承され、かつ緊急に調査を必要とする民俗芸能という条件枠が設けられていたことで、1960 年代以降に多く創設された太鼓や、伝承になんら不安のない民俗芸能の団体など、回答者の主観でアンケートの質に温度差が生じていることを考慮する必要がある。

道内で伝承されている民俗芸能は、神楽系、風流系、語り物・祝福芸、その他、アイヌ古式舞踊といった 5 系統に分類することができる。また、両資料には、いずれも延年・おこない系、渡来芸・舞台芸、大道芸・見せ物系などに含まれる民俗芸能はみられない。

次に、両資料にみられる民俗芸能の数量を 5 系統ごとに比較すると次のようになる。

神楽系は、a125 件と b101 件の計 226 件である。a と b に重複する民俗芸能を整理して、項目ごとに増減を示すと、重複している 84 件を除くと、神楽は計 142 件となる。このうち重複分を差し引くと、a が 41 件、b が 17 件と、その差は大きく、減少傾向にあるといえる。神楽の名称は、伝承する側の地域や神社名、あるいは伝承元に係わる地域や芸風などに、神楽、獅子舞、獅子神楽、神楽獅子などを付けている。これらの多くは、創始の由来から次のように 3 つに振り分けることができる。①は、道南地域で近世期から伝承されていた松前神楽や明治期以降に松前神楽の影響を受けた神楽。②は、道外ですでに成り立っていた神楽や獅子舞が、出稼ぎや移住などを契機にして道内でも受け継がれたもの。③は、熊や鬼などをモチーフにして新しく創作したものに分けられる。

神楽の伝承元となった地域は、青森県、岩手県、秋田県、宮城県、山形県、福島県、岐阜県、新潟県、富山県、石川県、福井県、島根県、広島県、香川県というように、北海道への移住者が比較的多い地域の民俗芸能がみられる。数量的には、富山県からの獅子舞が突出して多くみられ、青森県、宮城県、香

川県、新潟県から伝承した民俗芸能が続くのである。

風流系は、a が 99 件と b が 71 件の計 170 件であるが、ab に重複している 54 件を除くと、116 件となる。重複分を差し引くと、a が 45 件、b が 17 件と、減少傾向にある。風流系の内訳は、農耕暦に関わりのある芸能、鹿子舞、タナバタ系、盆踊り、傘踊り、小唄踊り・手踊り、練物、奴行列、四箇散米、祭囃子、駒踊り(駒踊り音頭を含む)、麒麟獅子舞、餅搗き踊り(餅搗き囃子を含む)、創作などがある。これらは、鹿子舞、タナバタや盆踊り、奴行列のように、伝承の端緒が近世期にあつて、松前藩やその近隣の地域の影響を受けたもの、伝承者の出身地の芸能を取り入れたもの、あるいは伝承地の特徴や産物をもとに創作した民俗芸能に分けられる。なかでも近世期からの伝承といわれる鹿子舞やタナバタは青森県周辺、幕末から昭和にかけて伝承した駒踊りは青森県と岩手県の影響を受けたとするものが多い。

語り物・祝福芸は、a が 1 件、b が 1 件と計 2 件で、ab の重複はない。

その他は、a が 51 件、b が 24 件の計 75 件であるが、重複している 20 点を除くと、55 件となる。重複分を差し引くと、a が 31 件、b が 14 件と減少傾向にある。これらには、労働歌のひとつであるニシン沖揚音頭が最も多くみられ、追分節やその元歌ともいわれる三下り、雅楽、歌舞伎・地芝居、競技に含めた力くらべの盤持などがある。ここでも地域の特産を生かした音頭や踊りなど新しく創作した芸能がみられる。

アイヌ古式舞踊は、a が 8 件、b が 15 件の計 23 件であるが、重複している 6 件を除くと、計 17 件である。重複分を差し引くと、a が 2 件、b が 9 件というように、アイヌ古式舞踊は 5 項目の内ただひとつだけ b の時点で増加している。これは 1983(昭和 58)年以降、保存会等の活動が活発化したことを意味しているといえる。

ここでは民俗芸能の名称をもとに分類して北海道の第一段階の分類表を作成し、さらに ab の 2 つの資料の時差から民俗芸能の増減をみてきた。ab 比較すると、太鼓を除いても数量的には、神楽、風流、その他といった民俗芸能が、この 15 年間に減少し、アイヌ古式舞踊の件数は増加していることが理解できる。しかしながら、この道内民俗芸能の分類表への集約は確定しているものではなく、伝承の内容を詳細に調査し、すでに途絶えた芸能についても、神社の奉納物や博物館の展示資料で補って、分類表を修正しながら検討を行う必要がある。

4. 研究成果

北海道の民俗芸能について 416 件の民俗芸

能を記している1983(昭和53)年報告と、214件になる1998(平成10)年の報告を再点検し、神楽系、田楽系、風流系、語り物・祝福芸、延年・おこない系、渡来芸・舞台芸、大道芸・見せ物系、その他、アイヌ古式舞踊の9項目に分類し、道内における伝承の特徴を示すと共に、2つの資料の時差から各項目の増減についてみてきた。その結果、道内の民俗芸能は神楽系、風流系、語り物・祝福芸、その他、アイヌ古式舞踊の5項目の民俗芸能に集約される。しかしながら、これらは名称を元にした分類であり、継続して検討していく必要がある。特に、今回の調査研究で久遠神楽の内容について詳細に検討したことにより、名は神楽であっても、風流系の踊りに含める必要があることが理解できた。

また、1983(昭和53)年と1998(平成10)年の報告書における数量的な比較によると、アイヌ古式舞踊を除いた項目の保存会数は、15年間で減少していることが明らかになった。

これまでに映像化した主な民俗芸能と、取り上げた目的は次のとおりとなる。

利尻町では、同町仙法志長浜神社の民俗芸能が中断した後、どのように復活させ、継続させていくのかを明らかにするため、約100年ぶりに長浜神社へ復活奉納した「利尻麒麟獅子舞」を取り上げて4年間の伝承過程を記録した。

深川市では、創設100年を迎えた猩々獅子五段くずし舞の現状と伝承元である香川県との交流と民俗芸能の役割を記録した。

釧路市では、利尻麒麟獅子舞と比較するため、鳥取神社大祭に奉納する鳥取りりん獅子舞と傘踊りを記録した。

函館市では、旧南茅部町の木直大正神楽、安浦駒踊り、豊崎手踊り、松前神楽を撮影し、市町村合併後、地域で伝承していた民俗芸能が、観光物産祭りや地域の伝統的な神社祭礼とどのような関わりを持つのかを記録した。

福島町では、福島大神宮において松前神楽、駒踊り、荒馬舞の現状を記録した。

松前町では、記念式典や観光祭りなどに関わる民俗芸能について、主に松前城築城400年記念事業を調査し、祝賀式典に花を添えた松前祇園囃子、松前神楽、清浦雨竜太鼓、松前古城太鼓と、共催事業として道内6地域の奴行列を紹介した北海道奴振大会について記録した。

地域調査に加えて、民俗芸能の伝承に向けて学校が取り組んでいる活動状況の把握のため、全道高等学校郷土研究発表大会を調査し、その現状を記録した。高等学校の伝承活動でみられる民俗芸能は、①に獅子舞や神楽など各地域にある民俗芸能を学校で伝承しているもの、②に創作太鼓など学校のクラブ

活動として立ち上げたもの、③に江差追分やソーラン節などの民謡や舞踊を郷土研究の一つとして取り上げて創作したものの、というように3つに区分できる。この調査では、特に郷土に伝わる民俗芸能の伝承に取り組んでいる赤平高等学校の住吉獅子舞を中心に記録した。

また、民俗芸能の活性化、あるいは安定した伝承を進めるために、舞台芸術や企業との関わりについてJTBオリジナルイベントである「杜の賑い」に出演した道内の民俗芸能保存会の活動をとおして検討した。

さらに、現存する民俗芸能の調査に加えて、伝承がすでに途絶えている民俗芸能の調査を実施し、アンケート調査から漏れている神社や博物館に残る民俗芸能関係資料についても記録した。ここでは、特に、利尻富士町郷土資料館に展示された南浜獅子神楽の関係資料、釧路市の城ノ丘神社に保管されている神楽道具一式、厚岸町郷土資料館に展示している神楽面、富良野市博物館に展示している布礼別神楽と富良野獅子舞の関係資料、登別市郷土資料館の獅子頭などについて、消失に至る伝承過程を調査した。

これらの有形・無形にわたる調査により、北海道の民俗芸能は、大きく4つの系統に分類することができる。

①は、近世から道内で伝承している民俗芸能である。これには、松前神楽、鹿子踊、荒馬舞、七夕などのように、近世から伝承している神楽や風流系の踊りがみられる。

②は、アイヌ民族が伝承している民俗芸能である。

③は、アイヌ民族と和人の異文化の交流によって伝承されてきた民俗芸能である。松前神楽の演目の中や「厚岸かぐら」へのアイヌ民族の関与など相互に影響を与えたものがみられる。あるいは、和人の三匹鹿子舞の鹿子頭が、アイヌ民族の子供の遊戯に再利用されているものもみられた。

④は、主に近代以降に道外から道内へ伝承した民俗芸能である。道内で伝承されている神楽や獅子舞の多くは、伝承の母胎となった道外地域の民俗芸能と関係している。しかし、内容が全く同じという事例は少なく、伝承の過程で変化した事例がみられた。また、神社の奉納物や博物館の展示資料に、面などの民俗芸能の関係資料がみられるように、道外から伝承した民俗芸能の中には、すでに途絶えたものも少なくないことが明らかになった。

今後は、この4カ年の基礎研究で得た知見を基に、道内に民俗芸能が伝播されるに至った経緯、あるいは北海道で伝承あるいは消失した過程を明らかにし、かつて存在した民俗芸能の分布と構成の特徴を、改めて提示する

必要がある。

さらに、北海道の民俗芸能について、種別ごとに伝承の系統図を補強し、移住後に、あるいは出稼ぎ時にどのような民俗芸能を導入してきたのかを、時系列にまとめて、これまでの分類表を修正したいと考える。あわせて、20世紀中頃以降に戦争、過疎、少子高齢化、市町村合併という社会的な諸問題に直面した民俗芸能が、道内では、伝承の過程でどのように変容したのかを明らかにしたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 舟山直治・為岡 進、「北海道における民俗芸能の伝承に関する研究－2008(平成20)年度と4ヵ年の調査概要」、『北海道開拓記念館調査報告』、査読無、第48号、2009、pp.71-90。
- ② 舟山直治、「北海道における鹿子頭の再利用に関する研究」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第37号2009、pp.59-68。
- ③ 舟山直治・為岡 進、「北海道における民俗芸能の伝承に関する研究－2007(平成19)年度調査概要」、『北海道開拓記念館調査報告』、査読無、第47号2008、pp.59-70。
- ④ 舟山直治・手塚 薫・池田貴夫、「北海道における鹿子舞とその伝承－物質文化から見えるもの－」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第36号2008、pp.79-102。
- ⑤ 舟山直治、「正月の門付け神楽」、『文化情報』北海道文化財保護協会、査読無、第305号、2008、pp.3。
- ⑥ 舟山直治・為岡進、「北海道における民俗芸能の伝承に関する研究－2006(平成18)年度調査概要－」、『北海道開拓記念館調査報告書』、査読無、第46号、2007、pp.83-96。
- ⑦ 舟山直治・為岡進、「北海道における民俗芸能の伝承に関する研究－2005(平成17)年度調査概要－」、『北海道開拓記念館調査報告書』、査読無、第45号、2006、pp.63-74。

[学会発表] (計 1 件)

- ① 舟山直治、「明治期における鹿子頭の再利用」、日本民俗学会第60回年会、2008年10月5日、熊本大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

舟山 直治(FUNAYAMA NAOJI)

北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：90181445

(2) 研究協力者

為岡 進(TAMEOKA SUSUMU)

写真家

研究者番号：なし

佐藤一志(SATO HITOSI)

江別市教育委員会・学芸員

研究者番号：なし

